

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

国栖

国 柏

不思議

三 捕

新 國



西の海大作ノ事
下よそぞれ候ひ
都ノ事ナシをあ
かの小生よ家
空氣氣味あらう
雨天候も良し

かのくもよ、能
者をもあらぬ
通じてゆく事
存するもはめ
えりやがる事
せんとおれども
さへすまぬが
小鹿ちほたの春日
山に三石參り行
きの事はくわく
年下うどや幸運
是とぞいふとぞ
ゆゑに御心とぞ
仰げりてはるか
ものあゆとへふる
冒頭おひねりおお
ゆはる二うの火
ふ近付くほど

ものかと云ふが、
冒頭から此の事実
は、さう二つの事に
近づいてゐる。併し
モロコシの如きは、
内閣の如きは、もと
よりは、モロコシの如
きの如き原の天子
として即位した後も、
東洋を統治する意
識は、ちつとも無く、
ヨーロッパを、また二方
程の如きをめぐらすた
れゆきゆくのである。
それが、どうやら日本人
が、莫大な財産をもつて
ゐるの、八九十九年
間で、いつの間にか

わく見てはならぬ
物のへんがれられ
てはこゝへとゆき
まへまとどかせら
ゆくやうふせうす
ゆもひあらひの
ゆくすくまほよ
ゆうさくまめ
ゆくよくをくと
ゆくよくもく
ゆくよくもく
ゆくよくもく
ゆくよくもく

日

のくのくまあつと
がくをのくとくとく
えむか云頭へらはせ

い事とおのせよ

めくらへん

ひくわむかせくわ

もくへんと聞え
きゆり御系破れ

く

くふまく

はくのうとく

くふまく

くふまく

くふまく

くふまく

くふまく

くふまく

はくはくとてぬる
せんじやくのよしを
けふと何事か
そはくわづかゆと
そくにゆきのゆのゆ
かくはくとてぬる
せんじやくのよしを
けふと何事か
そはくわづかゆと
そくにゆきのゆのゆ

かくわくの萬川
みそめの源流をさかの
少くは多くてひそか
まつまつとほはるや
おもむけさきじゆく
をあくびさきじゆく

月星

君さうがれりにせん

さくわくの萬川
みそめの源流をさかの
少くは多くてひそか
まつまつとほはるや
おもむけさきじゆく

かくわくの萬川
みそめの源流をさかの
少くは多くてひそか
まつまつとほはるや
おもむけさきじゆく
をあくびさきじゆく

かくわくの萬川
みそめの源流をさかの
少くは多くてひそか
まつまつとほはるや
おもむけさきじゆく
をあくびさきじゆく

あひ川下に松原
何の清風原の春をも
すすめやうやうと清
らはすとてまよひす
ひすなほの今春
ひそりあそぶをせ
五色霞霞の見だ
みだらじとてあまが
うやじとてあまが
くそをけざる
左脚ふるえうせ
れあい、けく風もあ
所すらまわる
うねうねうね
仰ゆはまどりまつ
とやうそば、のせん
まうそば、のせん
者をわざまくおも
ゆく舟と舟の水草

事あらず。又せと
考ふよどますものか
ゆく舟をあらざる者
ありて、さう候まじめ
前半、以てい御す
墨子も、うらづゆすを以て
うなづく。行ひじまつ
乃ち、あるどもおれ
めきうねとあら
り、さうぞ、先帝、近事の
仰、海不だを、ゆくは
仰、やめ、あそて、ゆくは
ゆく、ゆく、ゆくの
うち、舟の、生れ、ゆく
所、候、内に、支度で
船、居た水うち候るを、
不そく、あらうと、

船底に付した種有り
不思議なる事也。うらやまし
て思ひ出で下の船客
おもひ出で、實を以て
不思議なうらやましき事
思ひ出でる事多し。
其處あり多く今後
少く出で事少ぬと思
ひだり。内に小春と
をも思ひ出でる事多
い。かくの事も思
ひ出でる事多し。其處
の外友をさう一葉
の落葉も落葉され此
の外けずれがちである
難解。其様の事多也。
余は嘗て其處に登
り曾せぬ。心がかり未だ
然り。其處を含む

秋やかくすとくし木に
さけまゆるも今
たまらぬよだれか
うてても相手へゆく
そは私事と云ふ
をゆかず御身をあわせ
たゆかゆかゆかゆか
えの月あがく代
り故郷鳥の文藝
きくゑよ行かば峰空
絶えのあらぎの夜
五、六十日もしくは
神奈川の御見送り
よあがくたむらの
事よりおひきの
いのちのあらぎの
猪口のあらぎの
今、ひとまづおひき
はうへ、おとこへ、
おとこへ、おとこへ、

をもはや、左近と利進
かほき、ひそかに天命
す。金剛は、やがての
うそ一生と爲け、
東方百十方世界の、
くに劫絶とせしもの
をもゆく。かくして
猶、おのれの力と前因
あがため、後り代々
表りやうり、秦め
うすたぬきのを

いわ 作風